高等学校男女共学に対する意識調査(第2報)
－学習形態の評価・性役割意識との関連－

羽田　貴史(教育学)
武藤　八恵子(家庭科教育)

Ⅰ　緒　言

第1報[1]では高校生活を回顧できる発達段階にある大学生による、男女共学に対する意見を、別学校出身者と性別数の格差の少ない共学校出身者を比較し、見られた違いや傾向から高等学校における男女別学への問題提起を試みた。その集計考察の中で更に追求すべき課題が見出された。

その1は、別学校出身者では別学という学習形態を「よかった」とする者と「いやだった」とする者が存在し、また共学校出身者では共学という学校形態を「いやだった」とする者は、男子9名3.7 %女子5名 5.9 %と少ないものの「よかった」とする者と「なんともいえない」とする者が存在することである。この別学共学という学習形態に関する評価が違う者にとって、別学共学に対する意見はどのように違い、どの意見が評価の分かれる点であるかを追求したい。

その2は、性役割観における違いと今回の調査内容との関連である。第2次世界大戦後中等教育に共学制が実施されてから、それは変化なく発展を続けたのではなく、1960年代の高校多様化とセットになった男女特性教育が強調されると、各県で男女別クラスや別学校が増加し共学制度が質的後退をする現象がみられた[2]という。男女の特性の強調は「男は仕事、女は家庭」という性別役割意識によるものであり、特性を重視することによって、この意識を更に強化する影響力をもっている。

性別役割意識は武家社会が成立発展し家族制度が確立すると共に、儒教や男尊女卑意識と結合しながら発展してきたもので、明治以降の男女別の学校制度を成立させてきた根拠でもある。この別学の基層ともいうべき性役割観が今回の調査項目とどのように関わるかを考察したいと考える。

Ⅱ　調査方法

調査時期、調査方法、調査対象者は第1報と同じである。ただ1の評価別の考察は第1報の評価の傾向がやや異なるため共学別クラス校出身者33名と学習形態評価の不明者を除いたため調査対象者は 712名になる。2の性役割観の考察では全員を対象とする。

Ⅲ　調査結果と考察

1．別学・共学の評価別からみる状況

別学校出身者を男女別には分類せず、別学であった事を「とてもよかった」と「よかった」とする者を別学肯定者とし、「なんともいえない」とする者を別学評価保留者とし「いやだった」と「とてもいやだった」とする者を別学否定者と三分類した。それぞれの分類の人数を表1に示す。別学肯定者に対し他の二分類は数も少ないので、保留者と否定者を合併して肯定群に対する比較対象として非肯定群とする。

共学出身者のうち、共学別クラス出身者は他の共学出身者と傾向がやや違った第1報の結果から除き、他の性別が3割未満の共学出身者と性別数格差の少ない共学出身者を加算して共学校出身者とし、性別には関係なく共学校であったことを「とてもよかった」と「よかった」とする者を共学肯定者、「なんともいえない」とする者を共学評価保留者とし、「いやだった」と「とてもいやだった」を共学否定者とし、保留および否定者を合併して、肯定群に対する比較対象として非肯定群とする。(表1参照)

(1) 別学校出身者の場合

① 別学に対する意見

別学肯定群と非肯定群（評価保留と否定者）の意見を比較して、危険率５％以下でχ^2検定による差がみられた項目は次の通りである。

肯定群の方が「そう思う」割合が多く、有意な差がある項目は、別学の利点とされる「(ア) 別学は異性を気にせずのびのびと過ごせて気楽である」と「(ウ) 別学は異性に遠慮をせずに能力が発揮できる」「(サ) 別学という伝統は守ってゆかなければならない」である。

非肯定群の方が「そう思う」と賛意が多く、有意な差がある項目は「(カ) 別学は異性とのコミニュケーションの方法やきっかけがわからなくなる」「(キ) 別学は思いやりをもつ態度を学びにくい」「(ク) 別学は異性を互いによく理解できなくなる」「(ケ) 異性が一緒のほうが互いに高めあえる」「(オ) 別学は同性だけなので視野が狭くなる」「(コ) 男女平等の社会に別学はふさわしくない」である。（図1参照）

以上の結果は第１報の別学校出身者と共学校出身者を比較した場合の共学出身者が示した結果と同じ傾向である。当然のことながら別学校出身者でも別学という形態に不満や疑いをもつ者は別学肯定者に比べ、共学への志向が大きい。

また第１報で共学校出身者が別学校出身者と比べて差がなかった(カ)(オ)(キ)(ケ)などにも差がみられた点に別学非肯定群が異性との交流、相互理解への不安感が非常に強いことが察せられる。つまり別学という形態への否定や評価保留はこの点に起因するのではないかと考える。

表１　評価別分類と人数

	分類	人数 名(%)	男子	女子
別学校出身者 419名	別学肯定者	226 (53.9)	120	106
	別学評価保留者	122 } 193(46.1)	69	53
	別学否定者	71	44	27
共学校出身者 293名	共学肯定者	230 (78.5)	165	65
	共学評価保留者	56 } 63(21.5)	48	8
	共学否定者	7	5	2

② 性役割観と異性観

「親しい友人がいますか」には別学肯定群と非肯定群ではχ^2検定による有意な差はない。また危険率５％以下では有意差はないが、関連する傾向がみられた項目は、非肯定群に「男は外で働き、女は家庭を守るべき」の考えに賛成の割合が少なく、「結婚前の性交渉はどんな場合にも避けるべきだ」が少ない。また家事の分担、結婚に「わからない」とする割合が多い傾向もみられる。

非肯定群はこだわらない結婚観や性観念（性道徳）をもっているものの、固定的性役割観から脱しようとしながら確信がもてず、男女平等の考えに立脚する役割にわり切れずにいることがみられる。（図2参照）

③ 高校生活の回顧

別学肯定群は高校生活をよかったとする者が90％、非肯定群でよかったとする者は57％である。学習形態に対する意識は高校生活の評価に連動している。

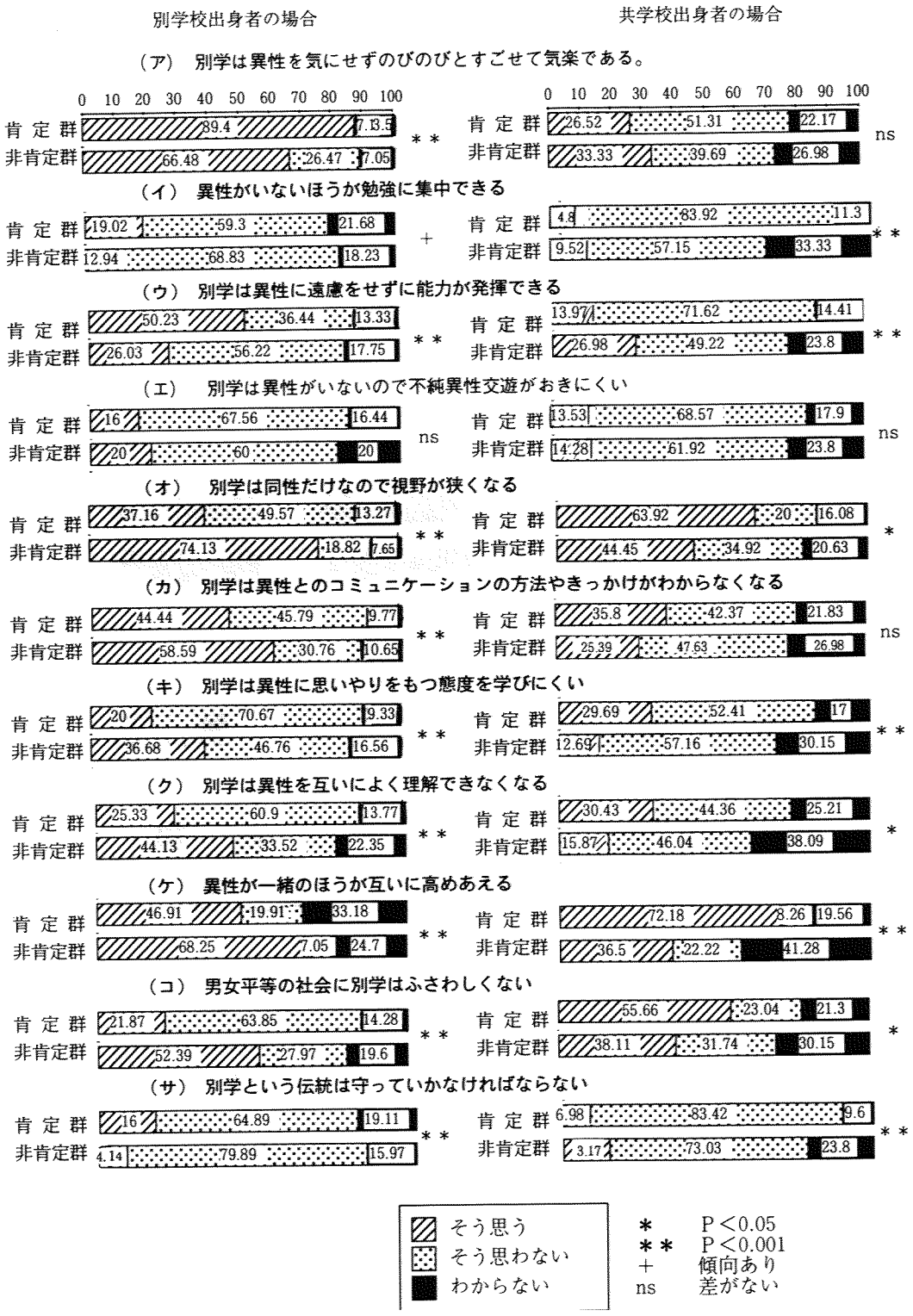
(2) 共学出身者の場合

① 別学に対する意見

非肯定者は肯定者の４分の１しか存在しないが、別学の利点といわれる「(ウ) 異性に遠慮をせず能力が発揮できる」「(イ) 異性がいないほうが勉強に集中できる」に対して「わからない」と疑問をもっている。「(ア) 異性を気にせずのびのびと過ごせて気楽である」の「そう思わない」の割合も少ない。第１報で共学校出身者は「自分の希望する大学に入学できる学力が身につかなかった」を不満の理由の第１位にしているが、この不満の原因を共学形態にあると考えていると考えられる。

また非肯定者は別学の問題点、共学の利点とされる「(ケ) 異性が一緒のほうが互いに高めあえる」「(キ) 別学は思いやりをもつ態度を学びにくい」「(ク) 別学は異性を互いによく理解できなくなる」の項目について肯定者より賛意が少なく、「わからない」とする割合が多いことから、共学によって男女の相互理解がそれほどできるとは思っていないと考える。ただ、「(カ) 別学は異性とのコミニュケーションの方法やきっかけがわからなくなる」は有意な差がないことから、機会はあるがその得られる結果は言われるようなものではないと認識しているのではないかと考える。

図１　学習形態の評価別における別学に対する意見



② 性役割観と異性観

友人の状況や性役割観、家事分担に対しては有意な差はないが、非肯定群の結婚に対する考えは「結婚すべきだ」の割合が肯定者に比べて少なく結婚前の性交渉について「わからない」が多い。また「性役割、男女平等の授業をうけた経験」が「ない」割合が多い。

①の結果と合わせて考えると、異性との対応の結果が彼等の思うようにはおこなわれなかった事が、共学の利点、別学の問題点、また結婚観や性観念に明確な考えがもてない状況をもたらし、共学形態への疑問になっているのではないかとも考えられる。

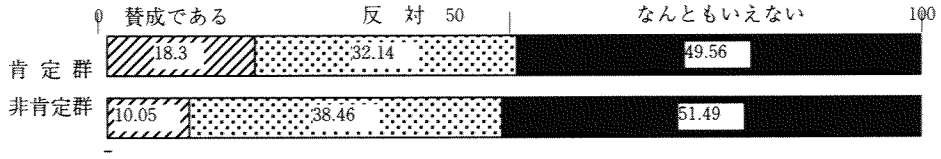
③ 高校生活の回顧

共学肯定群は高校生活をよかったとする者が90％であり、非肯定群はよかったとする者は54％である。この結果から別学出身者と同じく、学習形態の評価は高校生活の評価と連動しているといえる。

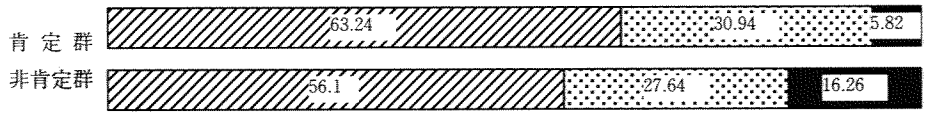
図2　学習形態の評価別における性役割観と異性観

別学校出身者の場合

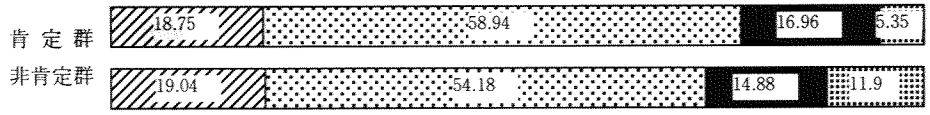
2―1 「男は外で働き、家庭を守るべき」という人がいます。あなたはこの考えについてどう思いますか



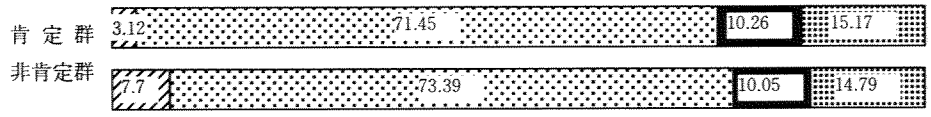
2―2 夫婦とも働く家庭が多くなっていますが、その場合、家事の分担についてあなたはどのように考えますか



2―3 結婚についてどのように考えていますか。次の中からあなたの考えに一番近いのをえらんで下さい。



2―4 結婚前の性交渉をどう思いますか。次の中からあなたの考えに一番近いのをえらんで下さい。



	2－2	2－3	2－4
▨	こだわる群	結婚すべきだ	どんな場合にも避けるべきだ
⁘	こだわらない群	結婚した方がよい	お互いに愛情があればかまわない
■	わからない	結婚しなくてもよい	愛情がなくとも、よければかまわない
▦		わからない	わからない

2　性役割観別からみる状況

今回の調査では性役割観を日本の青年意識調査[3]の設問と同じ「男は外で働き、女は家庭を守るべきという人がいます。あなたはこの考えについてどう思いますか」を用い、またこのような一般論ではなく家事分担という具体的場面による設問として「夫婦とも働く家庭が多くなっていますが、その場合、家事の分担についてあなたはどのように考えますか。あなたの考えに一番近いものをひとつ選んで下さい」を設定した。2問だけでは充分な判断ができにくいが、この2問を表2のように分類し性役割観の違いが調査項目とどのように関わり方をしているかを考察する。(表2参照)

考察は2問ともの男は外、女は家庭と性役割を限定して考えるグループ(こだわる群と表記)と従来いわれていた性役割にこだわらないグループ(こだわらない群と表記)とそれ以外のグループ(混乱群と表記)に三分類しておこなう。混乱群は表2で示すように、従来の性役割観に反対としながら、家事分担には従来の性による役割に賛意を示すグループ、従来の性役割観に賛成または反対と示しながら、家事分担にはなんともいえないとするグループ、性役割観にわからないとしながら家事分担にはこだわらない考えを示すグループ(保留－平等群)、性役割観にわからないとしながら家事分担には性別にこだわる考えを示すグループ(保留－伝統群)、2問ともわからない、なんともいえないとするグループ(未決定群)など多様な状態を併合している。よって人数もこだわる群やこだわらない群に比べて大多数になるが、この三群におけるχ^2検定により、性役割観と各項目の関連をみる。

①　別学に対する意見

性役割分類と各項目のクロス集計の結果、有意な差のある項目の中でこだわる群が「そう思う」とした人数の割合が「そう思わない」とした割合より、大きい状況を示した項目は

(ア)　別学は異性を気にせずのびのびと過ごせて気楽である
(イ)　異性がいないほうが勉強に集中できる
(ウ)　別学は異性に遠慮をせずに能力が発揮できる
(サ)　別学という伝統は守っていかなければならない
(キ)　別学は異性に思いやりをもつ態度を学びにくい

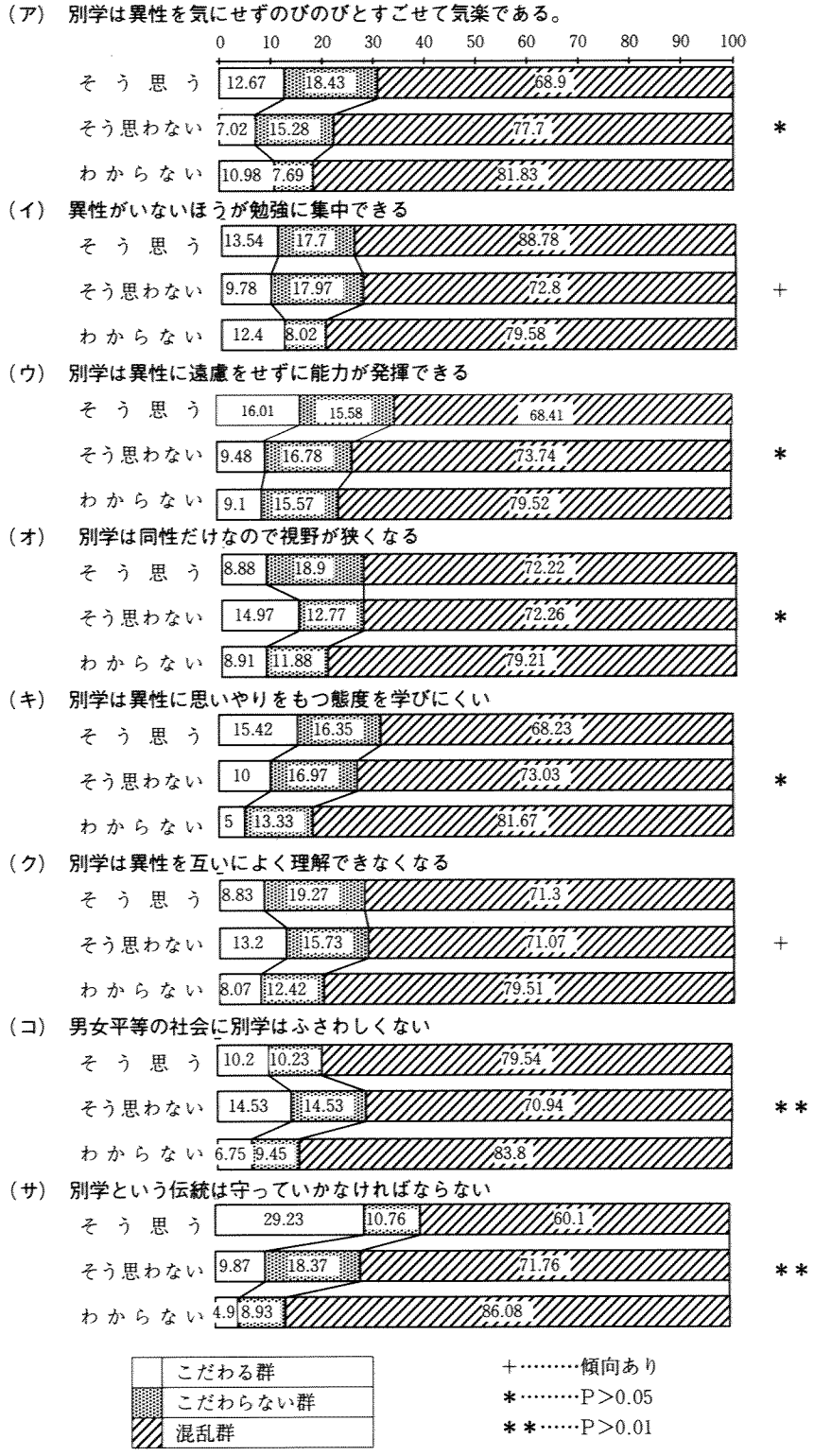
である。そしてこれらの項目は、(キ)を除くと別学の利点としてあげられた項目であり、1において別学校出身者の中で(イ)を除いて別学肯定群に賛意がみられた項目である。

性役割にこだわる者の方がこだわらない者より別学の利点に賛意を示し、伝統を守っていかなければならないと思っているといえる。

表2　性役割観の分類

設	問	人数(%)	分類名
①男は外で働き女は家庭を守るべきに対する意見	②家事の分担に対する意見		
A　賛成である	a　妻が主に分担し、夫も協力すべきだ a′　妻が分担し家事に差しさわりのある仕事はすべきでない	82名(10.7)	こだわる群
B　反対である	b　夫も妻も平等に分担すべきだ b′　夫か妻かいづれかが主に分担し他が協力する形でよい	124名(16.2)	こだわらない群
	a　妻が主に分担し、夫も協力すべきだ a′　妻が分担し家事に差しさわりのある仕事はすべきでない	561名(73.1)	混乱群
賛成または反対	c　なんともいえない		
C　わからない	a　妻が主に分担し、夫も協力すべきだ a′　妻が分担し家事に差しさわりのある仕事はすべきでない		
	b　夫も妻も平等に分担すべきだ b′　夫か妻かいづれかが主に分担し他が協力する形でよい		
	c　なんともいえない		

図３　性役割観別　別学に対する意見



こだわる群が調査項目に「そう思う」とした人数の割合が「そう思わない」とした割合より少ない状況を示した項目は

(オ) 別学は同性だけなので視野が狭くなる
(ク) 別学は異性を互いによく理解できなくなる
(コ) 男女平等の社会に別学はふさわしくない

であり、性役割にこだわる者は男女の相互理解の問題点に賛意は低く、別学は現在もふさわしくないとは思っていないといえる。

「わからない」とする人数の割合が「そう思う」または「そう思わない」割合より大きい数を示すのは混乱群にみられ、 中でもその状況は、

(ア) 別学は異性を気にせずのびのびと過ごせて気楽である
(キ) 別学は異性に思いやりをもつ態度を学びにくい
(コ) 男女平等の社会に別学はふさわしくない
(サ) 別学という伝統は守っていかなければならない

の項目にみられる。いいかえるとこれらの項目に対し意見に確信をもてない者は性役割観も混乱している、或いは性役割観が混乱している者はこれら別学の利点や問題点に対する意見がわからないといえる。特に(コ)(サ)の動揺は別学の存在に起因する混乱で、固定的性別役割観から脱却しようとしながら、別学の存在或いは存在の理由とされる伝統観から脱し切れずにいると考えられる。

以上の結果から、性別役割観に基づく男女特性教育が、大学生の性役割意識と別学に対する賛否、或いは曖昧さと関連していることが明らかになった。別学校の存在或いは肯定が固定的性別役割分業意識をつくりあげているといえる。

② 異　性　観

「親しい友人がいますか」の有無或いは「結婚前の性交渉」の項目には有意な差はないが、結婚観には差がみられる。性役割観のこだわる群が多い割合を示す項目は「結婚すべきである」と「結婚したほうが良い」であり、こだわらない群が多い割合は「結婚しなくてもよい」であり、混乱群は「すべきだ」と「しなくてもよい」は他にくらべて低い。(図4参照)

③ 出身高校別

出身高校を別学校と共学校に二分類するとχ^2検定では性役割観別には有意な差はない。別学校を男子校、女子校を別にして共学校と三分割してクロスをすると1%の危険率で有意な差がみられる。男子校には、性役割観のこだわる群、混乱群の割合が二極化しているが、女子校にはこだわらない群が多く、共学校はその中間を示す。第1報の結果と併せてみると性役割観における男子校の問題が考えられる。(図5参照)

Ⅳ 要　約

全国の各県に比べて、福島県は際立って別学高等学校数が多い。男女共生参画型社会をめざす現代にあってその問題点を考察するため、高校生活を客観的に回顧できる発達段階にある大学二年生(福島大学三学部)を対象に、高校生活への評価、別学に対する意見、性役割観、異性観などを調査した。第1報では別学校出身者と共学校出身者における違いを考察したが、本報も同じ目的から同調査を更に別な視点から考察するものである。

1. 学習形態の評価別からみる状況

別学校出身者を別学という学習形態を肯定する者と否定或いは「なんともいえない」と曖昧な評価する者とに分別し、肯定群と非肯定群として各項目との関連を考察した。同じく共学校出身者を共学肯定群と非肯定群に分別し、それぞれ比較した。結果は次の通りである。

(1) 別学に対する意見は、別学非肯定群は別学肯定群に比べ、別学の利点の項目に賛意は少なく、別学の問題点の項目に対しては賛意が高く、第1報の共学校出身者が示した傾向と同じ傾向を示す。また第1報の別学、共学で差がみられなかった異性との交流や相互理解の項目にも不安感を示している。別学への否定や疑問(保留)はこの点に基づくと考えられる。

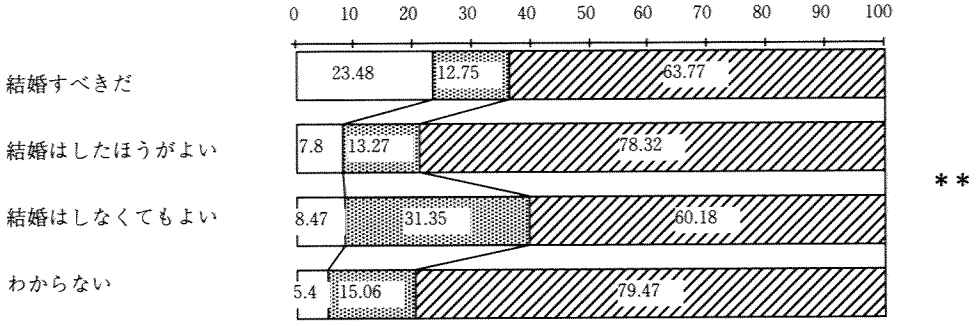
(2) 同じく別学に対する意見に、共学非肯定群は共学肯定群に比べ、別学の利点とする項目のうち学力に関する項目に「わからない」と疑問をもっている。また男女の相互理解にも賛同が少なく疑問をもっている。

(3) 性役割観と異性観について、別学非肯定群は別学肯定群と比べて、結婚や性観念にはこだわらないものの、固定的性役割観から脱却できずにいる傾向がみられる。

(4) 同じく共学非肯定群は共学肯定群に比べて、結婚や性観念に曖昧な考え方の状況がみられる。

図4　性役割観別　別学に対する意見

結婚についてどのように考えていますか。次の中からあなたの考えに一番近いものを選んで下さい。



結婚前の性交渉をどう思いますか。 次の中からあなたの考えに一番近いものを選んで下さい。

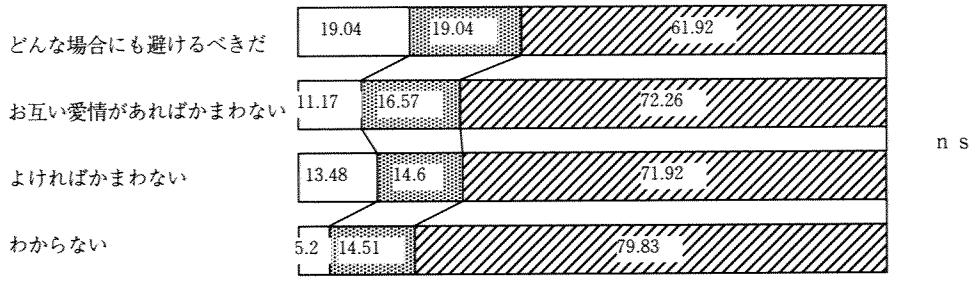
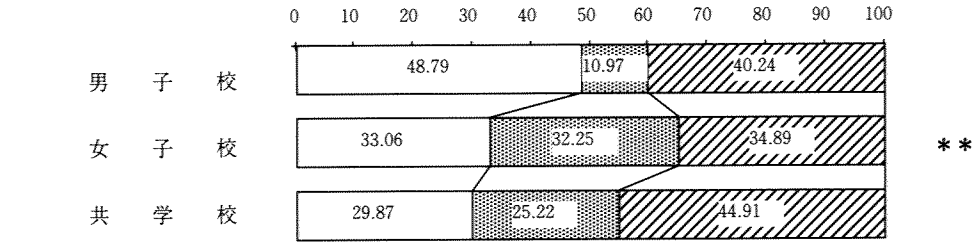
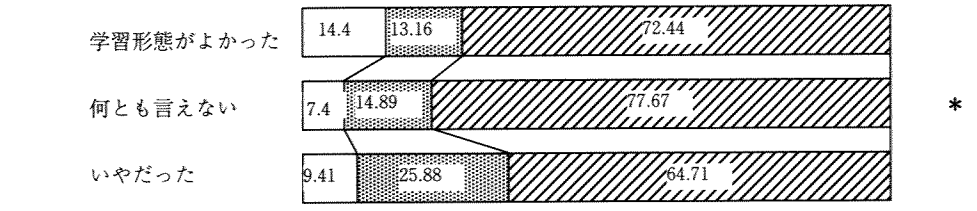


図5　性役割観との関連

卒業した高校はどうなっていましたか



あなたの高校が男女共学（男女別学）であったことにどう思いますか。



	こだわる群
	こだわらない群
	混乱群

＊……P＞0.05
＊＊……P＞0.01
ｎｓ……有意差なし

(5) 高校生活に対する評価は別学或いは共学という学習形態の評価に連動している。
(6) なお別学非肯定者は別学校出身者の46.1%、共学非肯定者は共学校出身者の21.5%である。

2．性役割観別からみる状況

性役割観と性別役割分業にこだわる群とこだわらない群、および混乱している群に分別して、各項目との関連を考察する。
(1) 別学の利点に関する項目の賛意については性別役割にこだわる群がこだわらない群に比べてその割合が大きい。
(2) 別学の問題点の男女の相互理解などについては、こだわる群はこだわらない群にくらべ賛意が低い。
(3) 性役割観の混乱群は別学の利点も問題点についても「わからない」が多い。特に別学の存立根拠である伝統に対する意見に曖昧な態度がみられる。
(4) 性役割観と結婚志向に関連がみられる。
(5) 性役割にこだわる群には、男子校出身者が多い。
(6) 三群の人数は、こだわる者10.7%、こだわらない者16.2%、混乱している者73.1%となり、性別役割分業観が混乱している者が多い。

以上の結果から

別学校出身者で別学を肯定しない学生は、男女の相互理解や異性との交流に不満、不安を強くもち、固定的性役割観と性観念のギャップにゆれている。共学校出身者で共学を肯定しない学生は数は少ないものの、共学での異性の交流の不適応から、学力や相互理解に疑問をもっている。共学であるというだけでは、共学の効果は発揮できず異性を含めた生徒間の交流に充分な配慮が必要になる。また別学校生徒の異性との交流のないことへの不安は大きい。

経済的自立や生活的自立をしながら男女が共に生きることをめざす現代社会にあっては、固定的な性別役割意識から脱却してゆかなければならないが、別学校ではそれができにくい状況がみられる。

男女の特性を重視し、「男らしさ、女らしさ」を育成すべき方向として、男女別のカリキュラムによった別学校成立の基層は現在学んでいる生徒の性別役割分業意識と関連する結果をもたらしていることが捉えられ、現代にあっても別学という存在を肯定することによって、性別役割分業意識が強化されていることも明らかになった。

豊かな人間形成をめざし、将来の社会を築き支えてゆく人間を育てる高校教育にあって、男女共学はその前提となるものであって、特に公教育にあってその教育要求は大きくしなければならないと考える。

本論文の執筆にあたっては調査用紙の作成及び実施・集計について羽田、武藤が共同でおこない、その結果に基づいて武藤が執筆したものである。

〔引用文献〕

1) 武藤八恵子、羽田貴史、高等学校男女共学に対する意識調査（第1報）福島大学教育実践紀要投稿中
2) 橋本紀子、男女共学制の史的研究、大月書店(1992) P.365～372
3) 総務庁青少年対策本部、世界の青年との比較からみた日本の青年（世界青年意識調査第4回報告書）(1989)